

この子と歩む



2019年12月 銀座・ギャラリーナユタの作品展 家族4人で

第348回

いろいろあったけど、大丈夫 —子どもたちの成長と新しい暮らし

足立早苗 (埼玉県越谷市)

月曜日の朝、娘(45歳)と息子(42歳)はいそいそと仕事に行く支度をします。脳性麻痺で重複障害のある娘と息子は、昨年から障害者支援施設「はれ」で、仲間たちと暮らし始めました。自立への一歩を踏み出した二人に、「いろいろあったけど、こんなにくましく育ってくれたので、大丈夫」とエールを送ります。

まっすぐに成長する子どもたちにはげまされて●

1975年、長女暁子が生まれました。腕の中に命の重みと温かさを感じました。生後6ヵ月、点頭てんかんと診断され、入院治療を受けました。若い医師から「寝返りも、話すこともできない重い障害を覚悟してほしい」と言われ、大きな衝撃を受けました。娘は3歳になる頃には四つ這いで活発に動き、話しかける言葉に表情豊かに応えるようになりました。医師の宣告が深刻だった分、その後の成長が喜びになりました。

暁子の誕生から3年後に、長男直久が生まれました。元気な男の子の誕生がとてもうれしかったです。しかし半年くらい経って、何か体の芯がしっかりしていないような違和感があり、発達の遅れを感じました。2人目の子どもの障害はなかなか受け入れることができず、医療機関を何カ所も回りました。暁子の療育に伴い、直久は保育園に通うことになりました。良い保育と集団に恵まれ、ひ弱だった体も丈夫になり、よく回らない口でたくさんおしゃべりをし、リズムや太鼓が大好きな子になりました。

暁子は地元の肢体不自由養護学校(当時)に、直久は